

---

# 暇つぶしの代償

レン太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

暇つぶしの代償

### 【Nコード】

N9088K

### 【作者名】

レン太郎

### 【あらすじ】

深夜のコンビニ。一人でアルバイトをしている俺。暇でしょうがない。すると、強盗が現れてしまった。これは、いい暇つぶしになりそうだ。

時刻は、午前二時を回ったところ。草木も眠る丑三つ時だというのに、俺は眠ることなく仕事をしている。

ここは、ど田舎のコンビニ。俺はしががない深夜のコンビニ店員だ。深夜のシフトは二人で、本来ならもう一人、店員がいるはずなのだが、突然「腹が痛い」とか連絡が入る予想外の展開に、話し相手もいなくなる始末。さらに田舎な故に、こんな時間に客なんか来るはずもなく、俺は退屈な時間を過ごしていた。

あくびをしながら外を見る。相変わらず真っ暗。一応、国道沿いに面してはいるが、車はまったく通らない。コンビニの周りは田んぼに囲われ、聞こえてくるのは、地響きのような牛蛙の鳴き声だけ。あまりにも暇なので、携帯ゲームで遊ぶとか、控室のテレビを見るとかをしたところだが、監視カメラに見張られている以上、何もすることがなくても、仕事をする振りをしなければならぬ。時給を下げられては、たまったものではないからな。

さほど汚れてもない床に、モップをゆっくりとかける。それが終われば品出し。コーラと酎ハイを一本づつ補充して終了。その後はレジに立ち、来るはずのない客を待つ振りをする。ああ、退屈で死にそうだな。

するとその時、店内にチャイムが鳴り響き、自動扉がすつと開いた。

「……客だ」そう思い顔をあげると、真っ黒な目だし帽を被った黒ずくめの人物が、俺の前に立っていた。

「いらっしや……」

どっからどう見ても、客の雰囲気を感じさせないその風貌は、当然のことながら、俺の言葉を詰まらせた。

「金を出せ」

やはり強盗。しかし、発せられた声の甲高さとその行動に、俺は度肝を抜かされていた。

声の感じからして、間違いなく女。そしてその右手には、凶器らしきものはなく、繊細で今にも折れてしまいそうな指が、俺を狙っているだけだった。

要するに、指でピストルを形作っているのだ。親指は真つすぐに天井を指し、人差し指という名の銃口は俺をロツクオン。中指を真横に突き出せば、『フレミングの右手の法則』が完成してしまうほどの勢いだ。

ここは大人しく金を渡すのが賢明だろうか。または、勇敢に立ち向かうのが善良な市民としての責務だろうか。それとも、開き直つてレジ台の上に立ち「ぼく、アルバイトオーツ！」と奇声を発するべきだろうか。ううむ、悩む。

相手は女。しかも凶器は、指鉄砲。勇敢に戦ったら、俺の勝利は間違いないだろう。いや、女といえど油断は禁物だ。もし、空手の有段者だったら、俺の鼻は見事に粉碎されてしまうかもしれない。

他の客でも来てくれれば、その客が騒ぎたて、この強盗は逃げてくれるだろうが、客が来る気配どころか、その静けさは、ますます増すばかり。ここは、俺がなんとかしなくては。

考えたあげく、やはり俺は戦うことを決意した。丸腰の女相手に屈するようでは、男がすたる。というか、暇つぶしの相手ができたと、脳の回路をポジティブに切り替え、俺も同様に、指鉄砲を強盗に突き付けた。

「フハハハ！ 馬鹿め！ こっちが丸腰だとも思ってたか！」

どう見ても、お互いに丸腰である。しかし、強盗は一瞬たじろぐそぶりを見せ、わずかに後退した。ひよっとして、これは面白くないってきたかもしれない。

たじろぐそぶりは見せたものの、強盗はその後、鼻で「フツ」と笑い、目だし帽を被っていても、はつきりと読み取れる笑みをこぼし、俺にこう言った。

「じゃあ、撃ち合ってみるかい？」

ヤバイ。マジで面白い。このシチュエーションに、腹を抱えて笑いそうになっていたが、せっかくの舞台がだいなしになってしまうので、俺は下唇をギョツと噛み、必死に堪えていた。

「いいだろう」

ここはコンビニという名のブロードウェイ。主演は俺。無敵のガンマン。そして、宿敵が現れての一騎打ちだ。これから舞台は、クライマックスに突入します。どちらさまも、お見逃しなく。

二人は睨み合ったまま、息をのむ緊張が続く。いつしか牛蛙の鳴き声も止み、辺りはよりいっそうの静けさに包まれた。

「みつつ数えるよ」

宿敵はそう呟き、俺もこくりと頷いた。

「ひとつ」

どうしよう。みつつ数え終わったら、お互いに「バン！」と言って、俺は倒れるべきだろうか。

「ふたつ」

いや、ここで倒れたら、主演男優の意味がないではないか。やはり、脇役に倒れてもらうしかないな。出来るだけ、リアルな演技に期待したいものだ。

「みつつ」

と言いつつ終わった瞬間、撃とうと思っていた俺だったが、意外な展開に、それを躊躇せざる負えなくなっていた。なんと、強盗は目だし帽を脱ぎ捨て、素顔を俺にさらけ出してしまったのだ。

髪がふわりとスローモーションのようにたなびき、シャンプーの香りが俺の鼻をくすぐった。そして、目の前に現れたのは、強盗などとは思えないほどの美女。いや、まさしく女神だった。

「バン！」

女神は可愛らしくそう言い、銃口から放たれた弾丸は、俺のハートを見事に撃ち抜いた。

「お金ちょうだい」

このやり取りの後、そう言われて、出さない男がいるだろうか。いや、いないと思う。

しかし、レジから金を出すのは忍びないので、俺は自分の財布から、なけなしの一万円を女神に手渡した。

「ありがとう」

女神はそう言い残し、俺の前から立ち去っていった。しかし、俺

は警察には通報しなかった。実は、自腹を切ったのはそのためもある。

そう、女神は一万円だけでなく、俺の心までをも奪ってしまっていたのだ。一万円は、暇つぶしの代金として、支払ったと考えることによろ。

もし、監視カメラの映像について聞かれでもしたら、「俺の彼女がふざけてやりました」と答えるのが、妥当ではないかと思う。

(了)

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9088k/>

---

暇つぶしの代償

2010年10月28日07時44分発行